

女性学研究センター年次報告・2001年度

著者	萩原 弘子
引用	女性学研究. 2002, 10, p.113-120
URL	http://hdl.handle.net/10466/10085

女性学研究センター年次報告・2001年度

1. 運営体制

2001年度、女性学研究センターは次のような構成員で運営にあたった。所長は中西進（学長、5月まで）に続いて丸山高司（学長、6月より）、主任は萩原弘子（兼任研究員、人文学科）が務めた。4月末日の専任研究員退職にともない、予定通りの事業遂行をめざして急いで態勢を整える必要があったため、やむなく萩原が主任を引き受けることになった。なにごととも例外的な1年となったが、兼任研究員全員がこの例外的な態勢を支えることに全力を尽くした。萩原以外の兼任研究員は、人文社会学部から岡真理（人文学科、9月末日まで）、木村涼子、熊安貴美江、谷村覚（以上3名は人間関係学科）、理学部から西山淳子（環境理学科）、大内本夫（応用数学科）である。兼任研究員7名（後期は6名）は、予算措置された全事業を分担して責任をもち、いずれの事業も無事に実行することができた。

女性学研究センターの年間事業や予算の基本方針と大きな枠組みについては、センター会議で審議し、さらに女性学研究センター運営委員会での議を経て、実際の実行や執行にあたった。

2. 授業

学部改組が3年めを迎え、新カリキュラムの専門教育科目「女性学演習Ⅰ」「女性学演習Ⅱ」の提供が始まった。担当は前期「Ⅰ」が岡真理、後期「Ⅱ」が木村涼子。また「女性学概論Ⅰ」（前期2単位）は4月中に補講も交えて専任研究員（当時）の船橋邦子が、「女性学概論Ⅱ」（後期2単位）は2002年1月に集中講義で萩原が担当した。ただし「女性学概論Ⅰ」の単位認定に関しては、認定時期が秋になる関係上、講義担当者ではないが主任が責任をもった。これらを専門教育科目としてカリキュラムに組みこんでいるのは、人文学科国際文化専攻と人間関係学科である。

教養科目「女性学入門Ⅰ」「女性学入門Ⅱ」はすでに1999年度より半期ごとの科目として提供しており、旧カリキュラム「女性学」（通年4単位）

の履修者はなかった。「女性学入門」の講義は学内の研究員と学外講師がオムニバス形式で講義を行ない、ほかに読書案内、小グループ・ディスカッションを実施した。読書案内は、例年どおり年1回前期に行なった。これは、オムニバス形式の講義ではどうしても入門段階でとどまることになるので、学生が各自の関心あるテーマを追究する助けとなるようにと考へてのことである。ディスカッションは、学生が自分の意見をまとめ発表する機会として設定している。読書案内は学生の多くが通年で履修するのが現状なので、繰り返しを避けて、前期だけに実行してきた。少数ながらいる後期のみ履修の学生には、個別に助言、指導をした。

年次の報告をする場ではあるが、この教養科目のオムニバス形式（年間27-28回の講義を12-15人が行なう）もそろそろ再考の時期にあることを書いておきたい。企画運営にあたる教員は、年間を通して毎回の講義に出席する。ほぼ隔週ごとに学生に書いてもらう講義感想文はすべてを読み、学生の成長を観察しながら、オムニバス講義それぞれの回が有機的につながったものとして理解できるように努める。たとえば、前期末に行なう読書案内のときに、また自分が講義担当のときに、必要な補足や軌道修正をしたり、学生たちの多くが書く似たような感想の分析をしたり、といったことである。それを複数の教員で協力しながら丁寧に進める態勢にあったときは、オムニバスの欠点である総花的な入門編の羅列になる傾向を十分カバーできていた。しかしそういう態勢は今後とれないだろう。また新しい状況として、いまや本学には女性学プロパーの専門家が複数いるうえ、専門教育科目としていくつもの女性学関連科目があり、女性学分野での研究を望んで大学院に進学する者も増えている。今後は総花的入門にとどまるのではない、専門的な知識への入門を提供することがさらに期待されるだろう。以上、本学の諸状況を考え合わせると、これまでのような多人数によるオムニバス形式によらずに、もっと体系的に女性学の知識を土台から積み上げていくような構成にする必要があるだろう。

3. 公開講座

「女性学入門Ⅰ・Ⅱ」を授業公開講座とし、府民15名（女性）が参加し

た。学生にとっては前期と後期で別科目だが、公開講座の参加募集は通年科目として行なった。このうち年10回の学外講師による講演については、府民教養講座として公開し、50名（男女）が参加した。また「女性学概論 I・II」も授業公開講座とした。以上いずれも応募者多数で、参加者の決定は抽選によった。「女性学概論」は2001年2月の公開講座案内時とは担当者、内容、提供形態が異なることになり、受講希望者の皆さんにはご迷惑をおかけすることになった。記してお詫びしたい。

4. 図書・文献資料の収集

2001年度は経常予算での図書備品購入を行ない、これまでに引きつづき、外国語文献資料ならびに新刊邦語文献を中心に収集した。また消耗品費による外国語雑誌購読も継続して行なった。年度末には、いずれの費目も過不足なく使い切るかたちで執行した。図書購入は地味だが重要で、かつ神経を使う仕事である。図書館司書の方たちと頻繁に連絡をとり、教えていただいたからこそ、予定通りの予算執行と蔵書構築ができた。

5. 女性学研究コロキウムの開催

2001年度は3回のコロキウムを実施した。第1回は12月15日に、「今日の教育政策とジェンダー」のテーマで行なった。村松泰子さん（東京学芸大学）からは「関東での動きを中心に」、神村早織さん（大阪人権・同和教育研究協議会）からは「関西での動きを中心に」と題してご発表いただき、有意義な討論のときをもった。紙数の関係で、本誌には報告を掲載していない。

第2回は2002年3月9日に、「女性政策と法——ドイツにおける自治体の男女平等政策と法、そして日本の男女共同参画社会基本法について」と題して、齋藤純子さん（国立国会図書館、ドイツ政治史）、松田聰子さん（帝塚山学院大学（当時）、法学）をお招きして行なった。本研究センターからは萩原が短い発表をした。第3回は3月10日に、「18世紀啓蒙期の科学とジェンダー」というテーマで、川島慶子さん（名古屋工業大学、科学史）と弓削尚子さん（早稲田大学、ドイツ史）をお招きして行なった。第

2回、第3回の内容は本誌掲載の論文等をご覧いただきたい。加えて、発表のあとの討論についても重要論点をまとめて紹介している。

以上3回の女性学コロキウムは、まったく異なる領域からのものとなった。それぞれの内容は充実したものとなり、学外の方から、本研究センターならではの個性を感じさせる企画だという嬉しい評価も戴いた。

6. 女性学連続講演会、連続セミナーの開催

第6期めとなった2001年度の女性学連続講演会、連続セミナーは、「働きたい、働けない——働く女性の「いま」と世界」のテーマで開催した。時期は6月9日から7月7日の毎週土曜日、5回である。連続講演会のタイトルは以下の通り。上田育子「パート労働、派遣労働と女性差別」、広木道子「多国籍企業と女性労働——NIKE（ナイキ）はどこから来るか」、伊田久美子「不払い労働とジェンダー」、竹中恵美子「労働権と男女平等政策——規制緩和と日本経済のいま」、萩原弘子「「働く」とはどういうことか——まとめ」。参加者は毎回平均して80名ほど。例年通り、参加者の質問に対する答えを翌週にはプリントにして配布した。

1時半から3時半までの講演会ののち、セミナーを4時から6時まで行なった。連続講演会参加者のなかから20名に参加していただいた。毎年希望者が多く、応募時にセミナー参加希望の動機を書いていただき、それを拝見したうえで20名を決定している。セミナー生は担当する課題文献についての発表を行ない、あらかじめ出された問いに答えを出すかたちで学習を進める。講演会から引きつづき残っていただいた講師からコメントをもらい、またほかのセミナー生との討論をしながら、ともに考えるというやり方である。こうして大学が社会教育として少人数のセミナーを行なっている例はほかに聞かない。むろん、論文という形式のものを読んで、発表して、というやり方ばかりが勉強ではない。しかしこういう大学独特の学習スタイルを、大学が、学生の身分にある限られた人だけでなく、社会的に開いて提供することの意義もあるだろう。6期までセミナーを開催してきて、そう確信するようになった。大学式のセミナーというスタイルを活かすには、20名という人数を越えないことがことのほか重要である。

第6期連続講演会の内容は、次年度予算で記録集として刊行される。2001年度は、前年度に行なった第5期の記録集『ジェンダー、教育、ナショナリズム』を作成し、第6期参加者をはじめ、各方面に配布した。

なお、連続講演会、連続セミナーは今期から初夏（6月頃）に実施時期を変更した。秋季に入学試験などの行事が多くなり、本研究センターの構成員が多忙にすぎて、十分な準備がむずかしくなってきたためである。

7. 海外交流事業の実施

2001年度は、韓国の梨花女子大学校アジア女性学研究センターとの3年計画の日韓女性学交流事業の2年めであった。9月に、兼任研究員の木村、熊安の2人が梨花女子大学校に出向き、シンポジウム「日韓における「キャンパス・セクシャル・ハラスメント防止対策」に関する実践報告」を開催した。シンポジウムでは、日韓のキャンパス・セクシャル・ハラスメント防止対策に関する実態調査報告などの交換を行ない、梨花女子大学校、大阪女子大学それぞれのとりくみなども互いに報告して、交流のときをもった。この事業の報告は来年度（2002年度）予算で作成する。

8. 男女共同参画政策推進のための研修事業

12月8日、9日の2日にわたって男女共同参画政策推進のための研修事業「男女共同参画を実現するために——世界の視点、生活者の視点」を実施した。ドーンセンターとの共催事業として開催し、1日めはドーンセンターの特別会議室で、2日めは本学の70周年記念ホールで行なった。これは2000年度に行なった研修事業に続いての2回めの開催である。（ここまで書いて、昨年度の年次報告でこの事業の報告を洩らしていることに気づいた。遺漏のないようにと心がけていても、こういうことになる。申し訳ないかぎりだ。）ドーンセンターには2年続きで共催申請を認めていただき、深く感謝している。今年は大がかりなことはできないと判断して、大阪に限って案内した。1日めは、齋藤純子さん（国立国会図書館）の講演「海外の男女平等法の現在——ドイツほかの欧州法を中心に」と、朴木佳緒留さん（神戸大学）の講演「男女共同参画社会基本法をどう活かすか」

につづいて、2人の講師を中心に短いシンポジウムをもった。2日めは、まず午前中に、「高齢社会をどう生きるか、どうつくるか——介護とジェンダー」と題する森俊江さん（高齢社会をよくする女性の会・大阪）の講演、午後に「オットコー座」による、性別分業を問う寸劇「夜明けは・何度も・やってくる——ある通夜の晩に」の上演、最後にパネル討論というプログラムであった。参加者は両日で延べ86名。

ドーンセンターの竹中恵美子館長には両日ともご参加いただき、有益なご助言をいただいた。また、劇の上演という「おおごと」もつつがなく行なうことができたのは、本学学生課の協力あってこそのことだ。

9. 『女性学関連図書目録 第3集』の刊行

図書目録は1991年3月に『第1集』、94年6月に『第2集 暫定版』を作成して以来の懸案であったが、なかなかとりかかれないうでいた。2001年度は例外的な態勢で本研究センターの運営にあたらねばならず、大学を取り巻く状況も大きく変わりつつあって、多忙な年度であり、冷静に考えればこの種の仕事に着手するのは愚かしいかぎりである。それでも思い切って『第3集 1982-1998年度』を作成した。内容的には『第1集』と『第2集』を含む累積版とした。138頁の目録の作成には、結局5カ月の労働を要した。98年度までの独特の歴史ある情報集積状況を知る者がいるあいだにしないことには、今後は一層作成しにくくなると思ひ、作成に踏み切った。99年度以降の収集分については情報集積をめぐる状況が変わり、比較的作成しやすいはずだ。もっとも次は印刷冊子ではなく、CD-ROMのかたちとなるだろう。今回の作成作業では、非常勤職員の伊藤ゆきこさんに、単に「助力」という以上に助けていただいた。

なお、送付の費用はないので、手渡しできる機会を逃さないように常時注意をはらって、大学図書館や女性学関連機関等にゆっくりと配布を進めている。

10. 専任研究員の人事

4月末の専任研究員退職の結果、専任研究員人事を行なうことが必要と

なった。それに際して、女性学研究センター規程、女性学研究センター運営委員会規程、および人事内規について、1999年の改組後の新体制に合わせて改正する必要があった。これらの規程は評議会の審議事項だが、素案づくりのためにセンター会議をくりかえし開いた。

新しい規程に基づいて人事委員会をたちあげ、募集方法を公募とし、最終的に11月の人文社会学部教授会で新任人事を決定した。2002年4月には新しい専任研究員、足立真理子さんが着任する。公募には多くのご応募があった。そのことじたいが本研究センターの社会的責務の大きさを示しており、応募者の方々すべてに深く感謝している。また、重責を負っていたいただいた人事委員会の皆様がたにも感謝したい。

11. 2002年度の新しい研究員の決定

2002年度主任には、4月に着任の専任教授足立真理子さん、新しい兼任研究員として伊田久美子さん（人間関係学科）を、2001年度末にセンター会議で決定、承認していることをご報告しておく。

12. 本誌の刊行、そしてさいごに

本誌も今号で10号を迎えた。実は本号より刊行予算年度を変更したので、2001年度の刊行はなかった。したがって本号については、本来なら次号に2002年度年次報告として掲載すべきところである。しかし次号からはまったく新しい態勢での刊行になるので、これまでの事情を知る者として、またほとんど全号の編集を担当してきた者として簡単に歴史をふりかえって、次への引継ぎとしたい。

創刊は、女性学研究資料室が出発した1991年度の年度末であった。創刊号には、当時の研究資料室構成員が論文を寄稿した。学外者も寄稿する女性学の論壇とすることが資料室構成員の望みであったが、大学という組織の制約、予算の制約などがあって実現はむずかしい。シカゴ大学出版局刊行の *Signs* 誌のようなものは、機構上できないのである。そこで考えたのが、コロキウムを行なって、学外からお招きした発表者に発表内容を後日に論文化していただいて掲載するというやり方であった。資料室構成員だ

けを執筆者としていたのでは、論集としての広がりをつくることもむずかしかっただろうと思う。創刊時は隔年刊行の論文集として予算がつき、第2号は2年後の1993年度末に刊行した。第2号を刊行して以後は毎年度刊行の予算措置がされ、毎年度末刊行を続けることになったので、コロキウム開催との連携は一層重要となった。

その本誌がこのたび10号を迎えた。本研究センターが追究する女性学の姿勢を対外的に示す重要な媒体であるので、センターの研究員はコロキウム企画の段階から、よそにはない論壇の形成を心がけ、また国際的な議論のレベルを意識してきた。毎号、海外の研究機関も含めて約千部を配布しているが、各方面から高い評価を頂戴している。コロキウム発表と論文執筆をしてくださった方々のおかげである。裏方である編集係はむしろ黙っているべきかもしれないが、編集係を離れるにあたって述べておきたいのは、本誌の編集は重労働ながらたいそう楽しい仕事であったということだ。毎号、原稿を頂戴してから完成まで数カ月も要したのは、私の能力の問題もあろうが、なにより入念に編集、校正を重ねたからでもある。「本づくり」の楽しさを知ることができて感謝している。

上述したように10号は2002年度の刊行物となった。2001年度に行なったコロキウム報告に並んで、2002年度からの新しい研究員による執筆原稿が掲載されているのはそのためである。

本誌の表紙デザインとタイトル・ロゴ・デザインは、デザイン事務所「スタジオ・タンDEM」さんに10年の約束で使わせていただいたものだ。「スタジオ・タンDEM」さんに感謝したい。新態勢で編集される次号からはまったく別の表紙デザイン、ロゴ・デザインとなる。

以上、2001年度は例外的な年であったが、学内外の多くの方々に支えられて、本研究センターの事業を予定どおり実施することができた。

(萩原弘子)